

現代中国の「昭君怨」批判に見える民族団結思想

阿部 泰記

一 はじめに

前漢（前206年－8年）の王昭君（前51年－前15年）は北方の遊牧民族である匈奴¹との和親に貢献した宮女として歴代の詩詞の中で題詠されているが、魯歌等編『歴代歌詠昭君詩詞選注』（湖北：長江文芸出版社、1982年。以下『選注』と略称する）は代表作を選注して、正史の『後漢書』「南匈奴伝」（432年）を根拠に、王昭君は自ら志願して匈奴に嫁いだのであり、決して怨んで匈奴に嫁いだのではないと主張し、後世の詩人たちが詠んだ所謂「昭君怨」詩は歴史を歪曲していると批判している。しかしそれは妥当であろうか。王昭君は積極的に匈奴に降嫁したのであるか。『後漢書』に先行すること350年前に執筆された正史の『漢書』「元帝紀」（82年）には元帝（前48年－前33年）が王昭君を匈奴の呼韓邪单于（生年不詳－前31年）に賜与したと述べ、王昭君が自分から志願して匈奴に嫁いだとは述べていない。宮女である王昭君には降嫁するしか選択肢はなかったのではないか。

実は『後漢書』で王昭君が志願したというのは、何年も元帝からの召見がなかったことへの積年の怨みからであった。とすれば漢と匈奴の平和を願うという崇高な理想に燃えてのことではなかったかも知れない。元帝も王昭君の美貌を見て匈奴への賜与を惜しんだと言うから、匈奴に対して誠実であったとは言い難い。『後漢書』を素直に読むと、正史にしてはあまりに王昭君に肩入れした記述に異様さを感じる。後世に王昭君に対する同情が生まれ、「昭君怨」詩が生まれる一因となったとも考えられる。²『選注』はこうした『後漢書』の記述を採用すべきではなかったのではないか。

『選注』は前言に政治家で中国共産党創立者の一人である董必武（1886年－1975年）の「謁昭君墓」（昭君の墓に謁する）詩（1963年）を掲げており、そこには民族団結を信条とする現代の政治思想が色濃く反映している。『選注』はこの董必武の思想に影響されて王昭君のイメージを創造したのではないか。

こうした民族団結思想は『選注』のみならず、政治家で中華人民共和国初代首相の周恩来（1898年－1976年）の指示に従って創作した曹禺（1910年－1996年）の歴史劇『王昭君』（1979年）にも表れており、同じく『後漢書』の記述を根拠にして創作したようだ。

本論では『選注』や曹禺劇などの「昭君怨」批判に反映した現代中国の民族団結思想について考察してみたい。

二 『選注』の「昭君怨」詩批判

『選注』の魯歌「前言」には冒頭に民族団結に貢献した功労者として王昭君を称賛した董必武「謁昭君墓」詩を挙げている。

正確に昭君の歴史功績を評価し、昭君が高邁な識見を以て漢匈両族の和好の為に、祖国の各民族の団結の為に貢献したことを賛美している。³

¹ 匈奴については、司馬遷『史記』「五帝本紀」黄帝に見える「葷粥」の唐司馬貞「索隱」に、「匈奴別名也。唐虞已上曰山戎、亦曰薰粥。夏曰淳維。殷曰鬼方。周曰玁狁。漢曰匈奴。」と注する。

² ちなみに蔣方『漢月辺関万古情：昭君与昭君文化』（北京：商務印書館、2015年）第92頁には、『後漢書』の記述には小説伝聞の色彩があり、先行する『琴操』『西京雜記』に集録する故事と関連があると述べている。

³ 『選注』第1頁、「正確地評價了昭君的歷史功績、贊美了昭君以高超的識見、為祖國各民族の団結作出貢獻。」

そしてこの「謁昭君墓」詩では、王昭君の和親の功績が忘れられることはなく、歴代の「詞客」がどれだけ「昭君怨」を詠んだとしても徒勞であると詠んでいる。

昭君自有千秋在、胡漢和親識見高。詞客各攄胸臆憑、舞文弄墨總徒勞。

(昭君自ら千秋在る有り、胡漢の和親は識見高し。詞客は各の胸臆の憑〔もた〕えを攄〔の〕べ、文を舞はせ墨を弄ぶも総て徒勞なり。)

それでは「昭君怨」詩とはどのようなものか、本論では晋石崇(249年-300年)「王明君辞、並びに序」と宋王安石(1021年-1086年)「明妃曲」を見てみたい。

1. 晋石崇「王明君辞并序」批判

晋石崇「王明君辞、並びに序」には、匈奴が元帝に熱心に婚姻を請うたので、元帝もそれに応えて後宮から良家の子である王昭君を娶せたと言う。

王明君者、本是王昭君、以触文帝諱改焉。匈奴盛請婚於漢元帝、以後宮良家子昭君配焉。

(王明君とは、本と是れ王昭君なり、晋文帝の諱に触るるを以て焉に改む。匈奴盛んにして漢の元帝に請婚すれば、後宮の良家の子昭君を以て焉に配す。)

ちなみに後漢班固(32年-92年)『漢書』「元帝紀」には、元帝の時、匈奴の郅支单于が平定されて漢に投降し、呼韓邪单于が辺境で永遠に戦争が起こさないことを誓言したため、祈念して「竟寧」と改元し、「詔を掖庭に待つ」宮女の王嬙を单于に「閼氏」(匈奴の妻妾)として賜与したと記すから、元帝の和平への期待のほどが窺われる。

竟寧元年春正月、匈奴呼韓邪单于来朝。詔曰、「匈奴郅支单于背叛礼義、既伏其辜、呼韓邪单于不忘恩德、嚮慕礼義、復修朝賀之礼、願保塞伝之無窮、辺垂長無兵革之事。其改元為竟寧、賜单于待詔掖庭王嬙⁴為閼氏。」

(竟寧元年春正月、匈奴の呼韓邪单于来朝す。詔して曰く、「匈奴の郅支单于は礼義に背叛するも、既に其の辜に伏し、呼韓邪单于は恩徳を忘れず、礼義を嚮慕し、復た朝賀の礼を修め、塞を保ち之を伝ふること無窮にして、辺垂の長く兵革の事無からんことを願ふと。其れ改元して竟寧と為し、单于に詔を掖庭に待つ王嬙を賜ひて閼氏と為す」と。)

ただ「王明君辞并序」には、王昭君が匈奴に旅立つ時、漢武帝の時に烏孫公主(劉細君)を餞別したように馬上で琵琶を弾いて慰めたであろうと言い、その際に造られた新曲には、王昭君が匈奴に到着後、夫の死後にその子(異母子)にも嫁ぐという漢族にとっては凌辱に等しい匈奴の習俗を嫌悪する心情も詠まれている。

昔公主嫁烏孫、令琵琶馬上作樂、以慰其道路之思、其送明君、亦必爾也。其造新曲、多哀怨之声、故叙之於紙云爾。「我本漢家子、將適单于庭。辞訣未及終、前驅已抗旌。僕御涕流離、轅馬悲且鳴。哀鬱傷五内、泣淚湿珠纓。行行日已遠、遂造匈奴城。延我於穹廬、加我閼氏名。殊類非所安、雖貴非所榮。父子見凌辱、對之慚且驚。殺身良不易、默默以苟生。苟生亦何聊、積思常憤盈。願假飛鴻翼、乘之以遐征。飛鴻不我顧、佇立以屏營。昔為匣中玉、今為糞土英。朝華不足歎、甘与秋草並。伝語後世人、遠嫁難為情。」

(昔公主の烏孫に嫁するや、琵琶をして馬上に樂を作し、以て其の道路の思ひを慰めしむ、其の明君を送るや、亦た必ず爾るなり。其の新曲を造るに、哀怨の声多し、故に之を紙に叙ぶると云ふのみ。「我本〔もと〕漢家の子、將に单于庭に適〔ゆ〕かんとす。辞訣未だ終はるに及ばず、前驅已に旌を抗ぐ。僕御は涕〔なみだ〕流離し、轅馬は悲しみ且つ鳴く。哀鬱は五内を傷め、泣淚は珠纓を湿らす。行き行き日に已に遠

⁴『漢書』文穎(字叔良、南陽人、後漢末荊州從事)の注に、「本南郡秭歸人也。」と言う。

く、遂に匈奴城に造〔いた〕る。我を穹廬に延〔まね〕き、我に閼氏の名を加ふ。殊類は安んずる所に非ず、貴しと雖も榮とする所に非ず。父子に凌辱され、之に対ひて慚ぢ且つ驚く。身を殺すは良に易からず、黙黙として以て苟〔かりそめ〕に生く。苟に生くるも亦た何ぞ聊〔たの〕しからん、積みし思ひに常に憤り盈つ。願はくは飛鴻の翼を仮りて、之に乗りて以て遐かに征かん。飛鴻は我を顧みず、佇立して以て屏營す。昔は匣中の玉為〔た〕るも、今は糞土の英為り。朝華は歎ぶに足らず、甘んじて秋草と並ぶ。語を後世の人に伝へん、遠く嫁するは情を為し難しと。〕

これに対して『選注』は、匈奴の習俗を尊重しない漢族中心の「大民族思想」を表しており、志願して降嫁し匈奴に永住した王昭君の真の姿を歪曲していると酷評する。

ここには大民族思想が何と強烈に表現されていることか！匈奴との和親を異類と居ると言い、胡俗に従うことを父子から凌辱を受けると言い、自殺したくでもできず、徒に生きながらえると言う。これのどこに志願して出塞し、慷慨して行くことを請い、匈奴で児女を育て、長年安住した昭君の口ぶりが窺えようか？これは昭君に対する歪曲である。⁵

だが胡俗に従わなければ「大民族思想」になるのであろうか。異母子と結婚することに抵抗することは叶わないのであろうか。

『漢書』「匈奴伝下」には、竟寧元年に呼韓邪单于が漢の婿になりたいと願い出たので、元帝は後宮に居を置く良家の子王牆（字は昭君）を賜与し、呼韓邪单于も元帝に辺境の軍備を解いて兵士を休ませるよう請うた。王昭君は「寧胡閼氏」（胡をやすんずる匈奴の妻妾）と号し、单于の子を生み、その死後、匈奴の習慣に倣って後継者である異母子と再婚して二女を生んだと言うが、王昭君が匈奴の習俗に対して素直に従ったかどうかは記されていない。

邳支既誅、呼韓邪单于且喜且懼、上書言曰、「常願謁見天子、誠以邳支在西方、恐其与烏孫俱来撃臣、以故未得至漢、今邳支已伏誅、願入朝見。」竟寧元年、单于復入朝、礼賜如初、加衣服錦帛絮、皆倍於黃龍時。单于自言願婿漢氏以自親、元帝以後宮良家子王牆字昭君賜单于。单于驩喜、上書願保塞上谷以西至敦煌、伝之無窮、請罷辺備塞吏卒、以休天子人民。……王昭君号寧胡閼氏、生一男。……呼韓邪死、……復株累单于復妻王昭君、生二女。

（邳支〔单于〕既に誅され、呼韓邪单于是且つ喜び且つ懼れ、上書して言ひて曰く、「常に天子に謁見せんと願ふも、誠に邳支の西方に在るを以て、其の烏孫と俱に來りて臣を撃つを恐れ、故を以て未だ漢に至るを得ず、今邳支已に誅に伏せば、朝に入りて見ゆるを願ふ」と。竟寧元年、单于復た朝に入るに、礼賜すること初めの如く、衣服錦帛絮を加ふること、皆黃龍の時に倍す。单于自ら漢氏に婿たり以て自ら親しむを願ふと言へば、元帝は後宮の良家子王牆字昭君を以て单于に賜ふ。单于是驩喜し、上書して上谷以西敦煌に至るまでを保塞し之を伝へて無窮ならんことを願ひ、辺に塞の吏卒を備ふるを罷め、以て天子の人民を休めんことを請ふと。……王昭君は寧胡閼氏と号し、一男を生む。……呼韓邪死し、……復株累单于復た王昭君を妻〔めと〕り、二女を生む。）

ちなみに、異母子が亡父の妻を娶るといふ匈奴の習俗に関しては、『史記』「匈奴列伝」に記述がある。

自君王以下、咸食畜肉、衣其皮革、被旃裘。壮者食肥美、老者食其余。貴壯健、賤老弱。父死、妻其後母、兄弟死、皆取其妻妻之。

（君王より以下、咸な畜肉を食らひ、其の皮革を衣〔き〕、旃裘を被ふ。壮者は肥美を食らひ、老者は其の

⁵ 『選注』第12頁、「看、這裏大民族思想表現得多麼強烈！把与匈奴和親說成是与「殊類」相处、把遵從胡俗說成是受父子凌辱、甚至欲殺身而不得、只能苟且偷生。這哪裏有一點自願出塞、慷慨請行、在匈奴生兒育女、安处多年的昭君口氣？這是对昭君的歪曲。」

余りを食らふ。壯健を貴び、老弱を賤しむ。父死して、妻其の後母を妻〔めと〕り、兄弟死して、皆な其の妻を取りて之を妻る。）

そして『漢書』「西域伝・烏孫国」では、漢武帝（前156年－前87年）の元封六年（前105年）に烏孫国の昆莫に嫁いだ公主劉細君が、昆莫が高齢で言葉も通じないことを悲観して、早く故郷に帰りたという歌を作ったが、武帝は使者を遣って慰問し、また公主が烏孫の習俗で昆莫の孫との再婚に抵抗したため、武帝はその国の習俗に従えと命じたと言う。「昭君怨」の前身と言ってよい。

漢元封中、遣江都王建女細君為公主、以妻焉。賜乘輿服御物、為備官屬宦官侍御數百人、贈送甚盛。烏孫昆莫以為右夫人。匈奴亦遣女妻昆莫、昆莫以為左夫人。公主至其國、自治宮室居、歲時一再與昆莫會、置酒飲食、以幣帛賜王左右貴人。昆莫年老、語言不通、公主悲愁、自為作歌曰、「吾家嫁我兮天一方、遠託異國兮烏孫王。穹廬為室兮旃為牆、以肉為食兮酪為漿。居常土思兮心內傷、願為黃鵠兮歸故鄉。」天子聞而憐之、間歲遣使者持帷帳錦繡給遺焉。昆莫年老、欲使其孫岑陁尚公主。公主不聽、上書言狀、天子報曰、「從其國俗。欲與烏孫共滅胡。」岑陁遂妻公主。

（漢の元封中、江都王建の女細君を遣りて公主と為し、以て焉に妻〔めあ〕はす。乘輿服御の物を賜ひ、官屬の宦官侍御數百人を備と為し、贈送は甚だ盛なり。烏孫昆莫は以て右夫人と為す。匈奴も亦た女を遣りて昆莫に妻はせ、昆莫は以て左夫人と為す。公主は其の國に至りて、自ら宮室の居を治め、歲時に一再昆莫と會して、酒を置き飲食し、幣帛を以て王の左右の貴人に賜ふ。昆莫は年老い、語言は通じず、公主悲愁して、自ら為に歌を作りて曰く、「吾が家は我を嫁す天の一方、遠く異國に託す烏孫の王。穹廬をば室と為し旃をば牆と為す、肉を以て食と為し酪をば漿と為す。居常に土思し心内は傷み、願はくは黃鵠と為りて故郷に歸らんことを」と。天子は聞きて之を憐れみ、間歲に使者を遣り帷帳錦繡を持ちて焉に給遺す。昆莫は年老いて、其の孫の岑陁をして公主を尚〔めと〕らしめんと欲す。公主は聴かず、上書して状を言ふも、天子は報じて曰く、「其の國俗に従へ。烏孫と共に胡を滅せんと欲す」と。岑陁は遂に公主を妻る。）

あるいは王昭君も烏孫公主のように異民族の風習になじめなくとも、国家のために忍従を強いられたかも知れない。とすれば晋石崇「王明君辞并序」に描かれた「昭君怨」も一概に否定することはできない。

ちなみに『漢書』から350年後に編纂された南朝宋范曄（398年－446年）『後漢書』「南匈奴伝」には、王昭君の匈奴行きは元帝の寵愛を得なかったための抗議であったと記されており、⁶ 元帝も王昭君の美貌を見て引き留めたかったが、匈奴との約束を破るわけにはいかず仕方なく匈奴に与えたと記されていて、いずれも匈奴との和親を目前にした言動とも思えない。そして匈奴の習俗で子が亡父の妻を娶ることに対しても、王昭君はそれに抵抗して帰国を希望したが、元帝に次いで即位した成帝（前51年－前7年）の勅命によって従わざるを得なかったと記されているから、王昭君は習俗を理解して再婚したわけではなかったことになる。

南匈奴醜落尸逐鞬单于比者、呼韓邪单于之孫、烏珠留若鞬单于之子也。（中略）初、单于弟右谷蠡王伊屠知牙師以次当左賢王。左賢王即是单于儲副。单于欲伝其子、遂殺知牙師。知牙師者、王昭君之子也。昭君、字嬀、南郡人也。初、元帝時、以良家子選入掖庭。時呼韓邪來朝、帝勅以宮女五人賜之。昭君入宮數歲、不得見御、積悲怨、乃請掖庭令求行。呼韓邪臨辞大会、帝召五女以示之。昭君豐容靚飾、光明漢宮、顧景裴回、竦動左右。帝見大驚、意欲留之、而難於失信、遂

⁶ 『選注』は、王昭君がそうした個人的な動機のほか、匈奴との和親のニュースを知っていたはずであり、自分から降嫁を願い出たと解釈するが、『後漢書』にそうは記載されていない。『選注』第6頁、「昭君自請求行、除了個人動機外、也不能排除她对通過和親加強漢匈友好的意義有一定的認識。」「多年敵对的匈奴单于親自來朝、這對當時漢室朝野自是哄動一時的大事、昭君在宮中当然不会不知道并对此有一定的認識。」

与匈奴。生二子。及呼韓邪死、其前閼氏子代立、欲妻之、昭君上書求歸、成帝勅令從胡俗、遂復為後单于閼氏焉。

(南匈奴の醜落尸逐鞬单于の比は、呼韓邪单于の孫にして、烏珠留若鞮单于の子なり。(中略) 初め、单于の弟の右谷蠡王の伊屠知牙師は次を以て左賢王に当たる。左賢王は即ち是れ单于の儲副〔太子〕なり。单于是其の子に伝へんと欲し、遂に知牙師を殺す。知牙師は、王昭君の子なり。昭君、字は嬙、南郡の人なり。初め、元帝の時、良家の子を以て選ばれて掖庭に入る。時に呼韓邪来朝するに、帝は勅して宮女五人を以て之に賜ふ。昭君は宮に入りて数歳、御に見ゆるを得ず、悲怨を積み、乃ち掖庭令に請ひて行くを求む。呼韓邪の辞するに臨んで大会あり、帝は五女を召して以て之に示す。昭君の豊容靚飾は、漢宮を光明し、顧景裴回すれば、左右を竦動す。帝は見て大いに驚き、之を留めんと意欲するも、而れども信を失ふに難く、遂に匈奴に与ふ。二子を生む。呼韓邪の死するに及び、其の前閼氏の子は代りて立ち、之を妻らんと欲すれば、昭君は上書して歸るを求むるも、成帝は勅して胡俗に従はしむれば、遂に復た後の单于の閼氏と為れり。)

『後漢書』を読んで知られることは、王昭君は元帝の寵愛を受けていれば志願して匈奴に嫁ぐ必要はなかつたろうし、元帝も王昭君が美貌だと知っていれば別の宮女を匈奴に賜与したであろうということである。『後漢書』にも「昭君怨」が表れていることが窺われることから、『選注』は『後漢書』に対しても批判すべきではなかつたかと考えられる。

なお王昭君の子の伊屠知牙師は後に太子になったが、後継者争いで殺害されている。これも和親が招いた悲劇である。

2. 宋王安石「明妃曲」⁷ 批判

『選注』は宋王安石「明妃曲」の「人生樂在相知心」(人生楽しみは相知の心に在り)の句をもって漢と匈奴を人として対等に見ているとして評価する。

大民族の伝統的な偏見を一掃して「人を理解するには、心を理解することが大事だ」に着眼した一句は、封建時代にあつて十分に得難いものだ。⁸

だがその一方では「明妃曲」が王昭君の匈奴への降嫁を憐れんでいると批判する。

当然、昭君が深宮に幽閉される命運を免れたために慰め、昭君が芳名を千古に留めたために慶んでいるが、どれも憐憫から出發している。もし彼女が遠く嫁すことを悲しいと認めないのであれば、又どうして彼女を慰める必要があるのか。もし本来喜び祝うべき事であるとすれば、又どうして之を慶ぶ必要があるのか。(中略) 王安石的詩にも彼女が「人生の失意は南北無し」と言っているではないか。⁹

確かに「明妃曲」は匈奴に出立する明妃の悲哀と、明妃を見送る元帝の苦衷を描き、さらに明妃が画師毛延寿に醜く画かれたため匈奴に遣られたという晋葛洪(284年-364年)『西京雜記』の記事¹⁰も引用して明妃の悲哀を強調している。

⁷ 「明妃曲」二首、『臨川文集』第四巻収。

⁸ 『選注』第21頁、「掃除大民族的の伝統偏見、而着眼於「人之相知、貴相知心」的の句子、在封建時代是十分難得的。」

⁹ 『選注』第22頁、「当然、為昭君免於幽閉深宮的の命運而寬慰、為昭君得以留芳名千古而慶幸、也還是從哀憐而出發。如果不認為她遠嫁可悲、又何須對她寬慰？如果本來就是可喜可賀的事、又何須為之慶幸？(中略) 就是王安石的詩不是也說她「人生失意無南北」嗎？」

¹⁰ 原文「元帝後宮既多、不得常見。乃使画工形、按圖召幸之。諸宮人皆賂画工、多者十万、少者亦不減五万。独王嬙不肯、遂不得見。匈奴入朝求美人为閼氏。於是上案圖以昭君行。及去召見、貌為後宮第一、善應對、拳止閑雅。帝悔之而名籍已定。帝重信於外国、故不復更人。乃窮案其事、画工皆棄市、籍其家、資皆巨万。」

王安石「明妃曲」は以下の二篇である。

其一

明妃初出漢宮時、淚濕春風鬢脚垂。低徊顧影無顏色、尚得君王不自持。歸來却怪丹青手、入眼平生幾曾有。意態由来画不成、當時枉殺毛延壽。一去心知更不歸、可憐着盡漢宮衣。寄聲欲問塞南事、只有年年鴻鴈飛。家人万里伝消息、好在氈城莫相憶。君不見咫尺長門閉阿嬌、人生失意無南北。

(明妃初めて漢宮を出づる時、涙は春風に湿り鬢脚は垂る。低徊し影を顧みて顔色は無きも、尚ほ君王の自ら持せざるを得たり。歸來して却って怪しむ丹青の手、眼に入るは平生幾ど曾て有らん。意態は由来画きて成さず、當時枉しく殺す毛延壽。一たび去れば心に更に歸らざるを知り、憐れむべし漢宮の衣を着尽するを。声を寄せ塞南の事を問はんと欲するも、只年年鴻鴈の飛ぶ有るのみ。家人は万里に消息を伝ふ、好く氈城に在りて相憶ふ莫れと。君見ずや咫尺の長門は阿嬌を閉ざし、人生の失意に南北無きを。)

其二

明妃初嫁与胡兒、氈車百兩皆胡姬。含情欲語独無處、伝与琵琶心自知。黄金捍撥春風手、彈看飛鴻勸胡酒。漢宮侍女暗垂淚、沙上行人却回首。漢恩自淺胡自深、人生樂在相知心。可憐青冢已蕪沒、尚有哀弦留至今。

(明妃初めて胡兒に嫁ぐに、氈車百兩皆胡姬なり。情を含み説かんと欲するも独り處無く、琵琶に伝へて心自ら知る。黄金の捍撥春風の手、弾きて飛鴻を看胡酒を勸む。漢宮の侍女は暗に涙を垂れ、沙上の行人は却って回首す。漢恩自ら浅く胡自ら深し、人生楽しみは相知の心に在り。憐れむべし青冢已に蕪沒し、尚ほ哀弦有りて留めて今に至る。)

『選注』は歴史では「昭君怨」はないとするが、そもそも王安石が詩題を「明妃曲」とした点に疑問を懐くべきであった。『漢書』では王昭君の身分は妃ではなく後宮で詔を待つ宮女であり、歴史との齟齬が見られるからである。

王昭君が「明妃」という呼称を得たのは南朝江淹(444年-505年)「恨賦」¹¹ の中であり、晋文帝の諱「昭」を避けて石崇が「王明君辞」と題した後、その「明君」を「明妃」に変えており、元帝と別れて異国で生涯を終える王昭君の悲哀を詠んでいる。

若夫明妃去時、仰天太息。紫台稍遠、関山無極。搖風忽起、白日西匿。隴雁少飛、代雲寡色。望君王兮何期、終蕪絕兮異域。

(若し夫れ明妃の去る時は、天を仰ぎて太息す。紫台は稍や遠く、関山は極まり無し。搖風は忽ち起き、白日は西に匿る。隴雁は飛ぶこと少なく、代雲は色寡し。君王を望むも何の期あらん、終に異域に蕪絶せん。)

王昭君を「明妃」と称することはその後も李白(701年-762年)「王昭君」¹² に「明妃西嫁無來日」(明

画工有杜陵毛延壽、為人形醜好老少必得其真。安陵陳敞、新豊劉白、龔寛、並工為牛馬飛鳥衆勢。人形好醜、不逮延壽。下杜陽望、亦善画、尤善布色。樊育亦善布色、同日棄市。京師画工於是差稀。」(元帝は後宮既に多く、常に見るを得ず。乃ち画工をして形を図かしめ、図に按じて之を召幸す。諸の宮人皆画工に賂し、多き者は十万、少なき者も亦た五万を減らず。独り王嬙のみ肯ぜず、遂に見ゆるを得ず。匈奴入朝して美人を求めて閼氏と為す。是に於て上は図に案じて昭君を以て行かしむ。去るに及んで召見するに、貌は後宮第一と為し、善く應對し、举止は閑雅なり。帝之を悔むも名籍已に定まる。帝外国に信を重んじ、故に復た人を更へず。乃ち其の事を窮案し、画工皆棄市され、其の家を籍するに、資皆巨万なり。画工に杜陵の毛延壽有り、人形の醜好老少を為せば、必ず其の真を得たり。安陵の陳敞、新豊の劉白、龔寛、並びに工みに牛馬飛鳥の衆勢を為す。人形の好醜は延壽に逮ばず。下杜の陽望も亦た画を善くし、尤も布色を善くす。樊育も亦た布色を善くし、同日に棄市せらる。京師の画工は是に於て差ば稀なり。)

¹¹ 『六臣註文選』第十六卷収。注に曰く、「翰曰く、同善注嘗て謂ふ、古人は時の否塞に遭ひ、志の申べざる有りて、是の賦を作るなり」と。

¹² 『樂府詩集』第二十九卷「相和歌辞」吟歎曲、『李太白全集』第四卷「樂府」および『御定全唐詩』第十九卷収。

妃は西のかた嫁して来る日無し)、白居易(772年-846年)「昭君怨」¹³に「明妃風貌最娉婷」(明妃の風貌最も娉婷たり)、杜甫(712年-770年)「詠懷古跡」¹⁴に「生長明妃尚有村」(生長せし明妃に尚ほ村有り)とある。

漢が匈奴を対等に見ていたと考える『選注』の歴史観からすれば、愛妃を賜与するなど和親の趣旨に反した不合理な創作として批判すべきであったろう。

三 「昭君怨」と歴史

1. 『史記』

和親のため公主以外の女性を匈奴へ嫁がせた事例は漢の司馬遷『史記』に見える。『史記』「劉敬・叔孫通列伝」には、劉敬が漢高祖(前256年/前247年-前195年)に長公主(皇女)を匈奴の冒頓単于(生年不詳-前174年)に嫁がせて和親を行うよう勧めるが、呂后(前241年-前180年)が長公主を「匈奴に棄てる」には忍びないと泣いて反対したので、「家人子」(宮女)を長公主と称して単于に嫁がせたと記す。匈奴に公主を嫁がせるのは惜しいという漢人の気持ちが表れている。

劉敬対曰、「陛下誠能以適長公主妻之、厚奉遺之、彼知漢適女送厚、蛮夷必慕以為閼氏、生子必為太子、代単于。何者、貪漢重幣。陛下以歲時漢所余彼所鮮數問遺、因使弁士風諭以礼節。冒頓在、固為子婿。死、則外孫為単于。豈嘗聞外孫敢与大父抗礼者哉。兵可無戰以漸臣也。若陛下不能遣長公主、而令宗室及後宮詐称公主、彼亦知、不肯貴近、無益也。」高帝曰、「善。」欲遣長公主、呂后日夜泣、曰、「妾唯太子一女、奈何棄之匈奴。」上竟不能遣長公主、而取家人子名為長公主、妻単于、使劉敬往結和親約。

(劉敬対へて曰く、「陛下誠に能く以て長公主を適がせて之に妻はせ、厚く之に奉遺すれば、彼れ漢の女を適がせ厚きを送るを知り、蛮夷は必ず慕ひて以て閼氏と為し、子を生めば必ず太子と為し、単于に代はらん。何すれぞや、漢の重幣を貪ればなり。陛下は歳時に漢の所余る所彼の鮮き所を以て數ば問遺し、因て弁士をして風諭するに礼節を以てせよ。冒頓在れば、固より子婿と為らん。死すれば、則ち外孫をば単于と為さん。豈に嘗て外孫の敢て大父と抗礼を抗ふ者を聞かんや。兵は戦ふ無くして以て漸臣なるべし。若し陛下の長公主を遣る能はずして、宗室及び後宮をして詐称公主を詐称すれば、彼も亦た知り、肯て貴近ならず、無益なり」と。高帝曰く、「善し」と。長公主を遣らんと欲するに、呂后日夜泣いて、曰く、「妾は唯だ太子と一女なり、奈何ぞ之を匈奴に棄てんや」と。上竟に長公主を遣る能はずして、家人子を取りて名づけて長公主と為し、単于に妻はせ、劉敬をして往きて和親の約を結ばしむ。)

後に「詔を掖庭に待つ」宮女である王昭君が公主の身代わりになって匈奴に嫁ぐ前例がここに始まったと言える。これを見ても、漢は決して匈奴を対等に見てはいなかったことがわかる。この時には宮女が匈奴の異母子と再婚することはなかったが、王昭君の場合はその命運を受け入れなければならなかった。

2. 『旧唐書』

和親は後世にも継続して行われた。後に『旧唐書』「吐蕃伝上」には、吐蕃に金城公主(生年不詳-739年)を降嫁させたことを記している。『史記』には和親のために降嫁する公主を見送る詩は記されていないが、唐中宗(656年-710年)は金城公主が幼少であったため、泣きながら従臣に命じて詩を賦して餞別させたことが記されている。宮女とは違って公主の場合、悲哀も並々ならなかったであ

¹³ 『楽府詩集』第五十九卷「琴曲歌辞」および『御定全唐詩』第二十三卷「琴曲歌辞」収。

¹⁴ 清仇兆鰲『杜詩詳註』第十七卷および『御定全唐詩』第二百三十卷収。

ろう。

四年正月、制曰、「(前略)金城公主、朕之少女、豈不鍾念、但為人父母、志息黎元。若允乃誠祈、更敦和好、則辺土寧晏、兵役服息。遂割深慈、為国大計、築茲外館、聿膺嘉礼、降彼吐蕃贊普、即以今月進發、朕親自送於郊外。」(中略)其月、帝幸始平県、以送公主、設帳殿於百頃泊側、引王公宰相及吐蕃使入宴。中坐酒闌、命吐蕃使進前、諭以公主孩幼、割慈遠嫁之旨、上悲泣獻歎久之。因命從臣賦詩餞別、曲赦始平県大闢罪已下、百姓給復一年、改始平県為金城県、又改其地為鳳池郷愴別里。公主既至吐蕃、別築一城以居之。

(景龍四年(710年)正月、制に曰く、「(前略)金城公主は、朕の少女にして、豈に鍾念せざらん、但だ人〔たみ〕の父母為れば、黎元を息〔やす〕むるを志す。若し允に乃ち誠祈し、更に和好を敦くすれば、則ち辺土は寧晏にして、兵役は服息せん。遂に深慈を割き、国の大計の為に、茲に外館を築き、聿〔ここ〕に嘉礼を膺〔う〕けて、彼の吐蕃の贊普(802年-841年)に降し、即ち今月を以て進發し、朕親自ら郊外に送らん」と。(中略)其の月、帝は始平県に幸して、以て公主を送り、帳殿を百頃の泊の側に設けて、王公宰相及び吐蕃の使を引るて宴に入らしむ。中坐酒闌にして、吐蕃の使に命じて進前せしめ、諭すに公主の孩幼にして、割慈遠嫁の旨を以てし、上は悲泣獻歎すること久し。因て從臣に命じて詩を賦して餞別せしめ、曲げて始平県の大闢罪已下を赦し、百姓に給復すること一年、始平県を改めて金城県と為し、又其の地を改めて鳳池郷愴別里と為す。公主既に吐蕃に至り、別に一城を築いて以て之に居る。)

その餞別の詩「送公主。奉和聖製、送金城公主適西蕃、応制」(公主を送る。聖製に奉和し、金城公主の西蕃に適〔とつ〕ぐを送る。応制)は、宋太宗勅撰『文苑英華』第七十六卷(982年-987年)に十七首を取録している。¹⁵ これらの詩では和親の重要性を強調してはいるが、その犠牲となって遠方へ降嫁する年若い公主の悲哀に対する同情が詠まれている。中には「曲怨」「馬上曲」「琵琶」の語を用いた詩もあり、王昭君の出塞に喩えている。

1. 漢帝撫戎臣、糸言命錦輪。還將弄機女、遠嫁織皮人。曲怨関山月、粧消道路塵。所嗟秣李樹、空対小榆春。(李嶠)

(漢帝は戎臣を撫し、糸言は錦輪を命ず。還た弄機の女を將て、遠く織皮の人に嫁す。曲は関山の月を怨み、粧は道路の塵に消ゆ。嗟く所は秣李の樹の、空しく小榆の春に対する。)

吐蕃を慰撫するために、皇帝は降嫁を命じられた。機を織る女性は遠く皮を織る男性に嫁いで行く。公主は関所に掛かる月を怨み、化粧も道路の塵に消される。若々しい姿も春の景色に空しい。

4. 青海和親日、潢星出降時。戎王子壻寵、漢国旧家慈。春野開離宴、雲天起別詞。空弾馬上曲、詎減鳳樓思。(張説)

(青海に和親する日、潢星の出降する時。戎王は子壻の寵、漢国は旧家の慈。春野に離宴を開き、雲天に別詞を起こす。空しく弾く馬上の曲、詎ぞ減ぜん鳳樓の思。)

吐蕃との和親の日は王室が降嫁する時である。吐蕃は婿となり、漢国は舅となる。春の野に送別の宴を開き、天の下で送別の詩を作る。だが馬上で送別の曲を弾いても空しく、公主が宮殿を思う気持ちは抑えられない。

6. 甥舅同親地、君臣厚帝郷。還將貴公主、嫁与耨檀王。鹵簿山川間、琵琶道路長。廻瞻父母国、日出在東方。(閻朝隱)

¹⁵ 作者は李嶠(645年-714年)、崔湜(671年-713年)、劉憲(655年-711年)、張説(667年-730年)、薛稷(649年-713年)、閻朝隱、蘇頌(670年-720年)、韋元旦、徐堅、崔日用、鄭愔(生年不詳-710年)、李適(742年-805年)、馬懷素(659年-718年)、武平一、徐彦伯(生年不詳-714年)、唐遠愬、沈佺期(約656年-約715年)である。

(甥舅は親地を同じくし、君臣は帝郷を厚くす。還た貴き公主を將て、耨檀王に嫁与せんとす。鹵簿は山川間たり、琵琶は道路長し。父母の国を廻瞻するに、日の出は東方に在り。)

甥(賛普)と舅(中宗)がこの地で親戚となり、君(中宗)と臣(賛普)がこの都を大事にする。さらに高貴な公主まで、吐蕃の耨檀王に嫁がせた。花嫁の行列は山川の間を通り過ぎ、悲しい琵琶の音は道路が尽きるまで続く。父母のいる故国を顧みれば、太陽は東から上がっている。

これらは送別の詩であり、公主が異郷に嫁ぐ辛さを詠んでいるが、到着後に公主が吐蕃の風習に適應できたかどうかはわからない。

なお公主は吐蕃にあつて積極的に和親を推進しており、『旧唐書』「李嵩伝」によれば、両国の国境を確定し、辺境を侵略しないよう宣告させている。

金城公主上言、請以今年九月一日樹碑於赤嶺、定蕃漢界。樹碑之日、詔張守珪、李行禕与吐蕃使莽布支同往觀焉。既而吐蕃遣其臣随漢使分往劍南及河西、磧西、歷告辺州曰、「两国和好、無相侵掠。」漢使告亦如之。

(金城公主上言し、今年〔開元二十一年、733年〕九月一日を以て碑を赤嶺に樹〔た〕て、蕃漢の界を定めんことを請ふ。碑を樹つるの日、張守珪、李行禕に詔して吐蕃使の莽布支と同一に往きて焉を観さしむ。既にして吐蕃は其の臣を遣り漢使に随ひて分かれて劍南及び河西、磧西に往き、歴〔めぐ〕りて辺州に告げて、「两国は和好し、相侵掠すること無かれ」と曰はしむ。漢使の告ぐるも亦た之の如し。)

だが、たとえ公主が和親に積極的であったにせよ、遠地の異民族へ嫁ぐことは辛いことであり、送別の詩には悲愴感が漂っている。「昭君怨」を詠う事例は歴史的にも存在し続けたと言える。

四 柳開の「昭君怨」否定

ただ、王安石と同じく北宋の古文運動家であった柳開(948年-1001年)の「代王昭君謝漢帝疏」(「王昭君に代はり漢帝に謝する疏」)¹⁶は、柳開が王昭君に代わって元帝に感謝を表明した上奏文で、和親は国家の大計であり、自分が匈奴に嫁いだのは忠心からであつて、男子の大臣に代わって元帝の憂いを除くことができると嬉しいと述べ、決して元帝を恨んではいけないことを表明して「昭君怨」を否定しているところは王安石とは考え方が異なる。

今用臣妾以和於戎、朝廷息軫顧之憂、壇場無侵漁之患、尽繫於臣妾也。是大臣之事、一旦之功、移於臣妾之身矣。臣妾始以幽閉為心、寵幸是望、今反有安国家、定社稷、息兵戈、静辺戎之名垂於万代、何有於怨憤也。

(今臣妾を用ひて以て戎を和し、朝廷の軫顧の憂を息〔や〕め、壇場の侵漁の患を無くすは、尽く臣妾に繫るなり。是れ大臣の事、一旦の功は、臣妾の身に移れり。臣妾は始め幽閉を以て心と為し、寵幸を是れ望むも、今反つて国家を安んじ、社稷を定め、兵戈を息め、辺戎を静むるの名は万代に垂るる有り、何ぞ怨憤有らんや。)

政治上では宮女が国家の犠牲となることは当然のことであり、柳開はその観点から忠臣である王昭君はかく語るべしと考えてこの疏文を書き著したものであろう。『選注』は詩詞を対象としているため、この作品は収録していないが、もし散文までその対象を広げていたならば、評価すべき作品として収録していたに相違ない。

五 曹禺『王昭君』五幕(1979年)¹⁷

¹⁶ 柳開『河東集』第三卷収。

¹⁷ 『王昭君』(成都：四川人民出版社、1979年)。

現代に至り、曹禺の歴史劇『王昭君』もまた『後漢書』を根拠にして「昭君怨」を否定している。作者の跋文「『王昭君』の創作について」¹⁸には、『王昭君』は虚構を加えているが、歴史の真実を写した作品であると述べている。

歴史劇は史実の基礎の上に少しの虚構の文章を置くことはできるが、歴史の基本的な真実に背くべきではない。¹⁹

また作者の周恩来への「献辞」には、民族団結を主題とした創作であることも表明している。

敬愛する周総理が生前に私に王昭君の歴史劇を書く任務を授けられた。私は周総理の考えが、この題材を用いて我が国の各民族の団結と民族間の文化交流を歌頌することであると理解した。²⁰

作品は和親を阻害しようとする勢力に打ち勝つという虚構を加えながら、両民族が団結することを演じている。

第一幕（竟寧元年、漢の長門宮）では、孫美人が皇帝を待つこと六十歳余りにして発狂し、勅命が下って先帝に陪葬されると、ショックを受けた昭君は志願して匈奴に嫁ぐと言う。これは『後漢書』「南匈奴伝」に記された皇帝の寵愛を待ち続ける地獄のような後宮からの脱出を演じたものである。ただ作品では王昭君の年齢を19歳、呼韓邪単于の年齢を47歳と設定しており、28歳年上の単于に進んで降嫁するというところには和親に貢献する犠牲精神を感じさせる。

第二幕（漢の建章宮）からは和親をめぐる攻防をテーマとする。匈奴では、左大将の温敦が和親に反対し、小売商の休勒の二子が漢の隊商を襲う。

第三幕（匈奴の龍庭）では、呼韓邪単于が休勒の二子を処刑し、国境は市を開いて文化交流が盛んになる。

第四幕（龍庭の附近）では、単于の子の嬰鹿が昭君の飴を食べて死んだことから、単于は昭君に疑念を抱く。

第五幕（昭君の帳幕）では、岳父の烏禪幕が嬰鹿を殺害した犯人である休勒を捕らえ、温敦の陰謀であることがわかる。

以上のように、作中では昭君の降嫁を匈奴の左大将の温敦が妨害するが、最後には挫折することを述べる。そして第三幕（第71頁-72頁）で漢の大臣の蕭育（前76年-3年）が漢の送親侯の王龍に和親の重要性を説く。

（蕭育）「王大人、現在漢、匈互通有無、『関市』大開、匈奴人学漢語、学紡織、学種地、学冶煉、学掘井、学中原文化。我們呢、也向匈奴学放牧、学馬術、学騎戰、学胡樂。」

（〔蕭育〕「王殿、いま漢匈は双方に有る物無い物を互換して、辺境市場を開いており、匈奴人は漢語を学び、紡織を学び、作付を学び、精練を学び、井戸掘りを学び、中原文化を学んでいます。我々も、匈奴に放牧を学び、馬術を学び、騎馬戦を学び、胡樂を学んでいます。〕」

また跋文では、この作品が過去の「昭君怨」を否定して真の王昭君の姿を復元したと自賛する。

昔王昭君はしくしくと泣いていたが、今はにこにここと笑っている。良いことではないか。²¹

ただこの歴史劇では王昭君が呼韓邪単于の死後、後継者である復株累若鞮単于（大闕氏の子）と再婚する出来事を演じておらず、忌避していると考えられなくはない。そして曹禺劇を継承する連環画

¹⁸ 原文「關於『王昭君』的創作」

¹⁹ 原文「歴史劇雖然可放在史實的基礎上做一些虛構的文章、但不應該違背歷史的基本真実。」

²⁰ 原文「敬愛的周総理生前交給我這個任務、写王昭君歴史劇。我領会周総理的意思、是用這個題材歌頌我国各民族の団結和民族之間的文化交流。」

²¹ 原文「過去王昭君哭哭啼啼、現在笑嘻嘻了、有甚麼不好？」

『王昭君』²²にも王昭君の再婚部分はない。

跋文の「匈奴は我々の一つの民族であって、番邦外国ではない。」²³という一文には、歴史より政治を優先した民族団結思想が反映している。

六 現代地方劇

現代の新編伝統劇の中には、曹禺『王昭君』のように、強い性格を持つ王昭君を演出した作品が創作された。たとえば崑曲『王昭君』九場(2008年)、豫劇『漢宮昭君』(2017年)、その他がそれである。

1. 崑曲『王昭君』九場(2008年)²⁴

本劇は「新編歴史崑曲」と銘打って王昭君の和親への貢献を称賛することを主題としており、末尾は董必武「謁昭君墓」を詠んで閉幕する。

〔行路〕では、従来の悲愴な匈奴への出立を改めて、昭君は呼韓邪とともに馬で疾駆し、草原の風景を堪能するという爽快な場面とする。

〔教織〕では、昭君は匈奴の娘たちに貂油の軟膏を顔に塗って肌の乾燥を防がせ、また羊毛による紡績を教え、収穫した米を賞味させる。漢文化の輸出である。

〔求親〕では、呼韓邪の死後、大閼氏は昭君に小賢王復株累との結婚を勧めるが、昭君は庶母であることを理由に固辞する。ただ異母子との婚姻を拒絶するわけではない。

〔花証〕では、昭君は漢帝の詔勅を待って復株累との結婚を承諾し、昭君が匈奴の結婚習俗を受け入れたことを明示する。

以上の〔求親〕〔花証〕二場は曹禺劇には無いストーリーである。

〔禪讓〕では、四十八年間、匈奴と漢は平和を維持していたが、烏累若単于が病に倒れ、左賢王の伊屠智牙師と呼衍王の輿が後継を争う。『後漢書』では伊屠智牙師は殺害されるが、本劇では、昭君が仲介して、「呼韓邪の英霊に守られて匈奴は四代の王が続いたが、王莽が帝位を篡奪して匈奴の地位を低くした」と言い、「外敵に対抗するため兄弟喧嘩をやめて王位を禪讓せよ」と伊屠智牙師を諭し、伊屠智牙師の命を救う。和親を重視するために歴史は改竄されている。また最後には毛延寿が現れて「昭君出塞図」の完成を告げており、毛延寿は和親に協力的な善良な絵師に変身している。

2. 豫劇『漢宮昭君』(2017年)²⁵

豫劇『漢宮昭君』も「新編歴史劇」と銘打った劇場版である。

王昭君は大単于が和盟を求めたことで兵士が十年ぶりに帰郷できると喜んで、侍女に情歌「長相知」を歌わせると、皇后王政君(前71年-13年)が見とがめて昭君を冷宮に監禁する。ちなみに「長相知」は曹禺劇に使用される「鼓吹鏡歌」『上邪』²⁶のことである。

²² 吳宗堯改編・張曉飛絵画『王昭君』(南京:江蘇人民出版社、1980年)、辛觀地改編・徐有武絵画『王昭君』(杭州:浙江人民美術出版社、1980年)、于秀溪改編・孟慶江絵画『王昭君』(蘭州:甘肅人民出版社、1980年)、陳長明改編・笑雨等絵画『王昭君』(上海:上海人民美術出版社、1981年)、姜智改編・晁錫弟絵画『王昭君』(石家莊:河北人民出版社、1982年)等。

²³ 原文「匈奴是我們自己的一個民族、不是番邦外国。」

²⁴ 新編歴史崑曲。劇場版。編劇:劉建軍。監督:叢兆桓。北方崑曲劇院資料。撮影制作:程偉。2008年10月15日。人物(出演者):王昭君(于雪嬌)、大単于(海軍)、小単于(王鋒)、漢元帝(許乃強)、大閼氏(張竹梅)、伊屠智牙師(饒子)、輿(侯雪龍)、毛延寿(范輝)、橙玲(譚志濤)、雪兔(張暖)。

²⁵ 出品:陳新琴。総企画:周樹群等。監督:韓震。編劇:姚金成。舞台監督:盧浩、李雲。作曲:耿玉卿。主催:中共商丘市委宣伝部・商丘市文化広電新聞出版局。2017年12月30日、CCTV11九州大戯台放送。人物(出演者):王昭君(陳新琴)、漢元帝(王効領)、呼韓邪(閻玉龍)、鄭婕妤(張燕)、李太監(韓振業)、蕭育(郭傑)、張姑姑(張萍)、烏敦(張偉)、屠隆奇(吳青峰)、盈盈(盛秋霞)、月月(葉勒勒)、休勒(劉国強)。

²⁶ 原文「上邪。我欲与君相知、長命無絶衰。(下略)」宋郭茂倩『樂府詩集』第十六卷収。

冷宮では鄭婕妤が六年監禁されており、王氏の繁栄に失望して縊死する。昭君は公主が匈奴に嫁ぐことを拒否しているため、公主に代わって呼韓邪に嫁ぎ、漢宮からの脱出を考える。なお鄭婕妤は曹禺劇では先帝に陪葬される孫美人に相当する。

烏敦は和親で匈奴が減びることを恐れるが、呼韓邪は漢の文化に学ぶことを選ぶ。休勒は烏敦のために関市で漢の隊商を襲う。「烏敦」は曹禺劇の「温敦」に相当する。

昭君は元帝から后妃に封じると告白されて感動するが、背信すれば再び戦争が始まると悟って降嫁を決心する。曹禺劇にはないストーリーである。『後漢書』の記述によると妥当ではあるが、和親を重視する観点からすると不合理である。

昭君も夢の中でしか元帝に会えないと悲しみ、父皇と呼んで元帝と別れ、雁が空に鳴く秋に長安を出立し、城外では呼韓邪が迎える。ここは元馬致遠（1255年－1321年）の雜劇『破幽夢孤雁漢宮秋』四折の趣向を用いて、悲劇性を表現している。

3. その他

この他にも曹禺劇に倣った作品に、新編湖南花鼓戲『昭君出塞』四集（年代不詳）²⁷、揚劇テレビ芸術映画『王昭君』（2010年）²⁸、広東漢劇『王昭君』（2020年）²⁹、新編大型歴史劇『王昭君』六場（2021年）³⁰などがある。

七 おわりに

胡中行（1949年－現在）「王昭君与和番的女人們」（王昭君と和番の女性たち）³¹には、宮女である王昭君には降嫁を志願する資格はなかったと言う。

王昭君たちの出塞が受動的であったか志願であったか、『漢書』と『後漢書』では説が異なるが、私はやはり『漢書』の「受動」説を信じたい、というのも一人の宮女には、恐らく志願して名乗り出て「出国」する資格もあるはずがないからである。³²

だが前述のように、『後漢書』によれば王昭君が降嫁を志願したのは後宮から脱出するためであり、積極的に和親に協力したわけではない。

ただ胡氏の言うように、降嫁する女子には悲哀が伴った。

和番は一人の女子にとって、関氏となるにせよ、暮末（吐蕃王后）になるにせよ、郷里を離れ、

²⁷ 劇場版。南県洞庭湖花鼓戲劇団。人物（出演者）：王昭君（陳愛香・李再蘭）、単于（胡進牛）、温敦（余立軍）、漢王（胡小花）、阿婷潔（王鳳蓮）、烏禪幕（趙遐齡）。

²⁸ 1996年初演。1999年、江蘇電視台が戯曲電視劇四集を制作して中国電視「金鷹獎」最佳戯曲片獎を獲得した。放送局：中央電視台・江蘇省廣播電視總台。CCTV11九州大戲台。曹禺原著、江蟄君京劇本改編。出演：江蘇省揚劇団。編劇：袁振奇。戯曲監督：范繼信。監督：錢愛東・易沼。人物（出演者）：王昭君（徐秀芳）、呼韓邪（侯長榮）、温敦（繆勇）、孫美人（吳蕙明）、蕭育（楊国柱）、阿婷潔（袁曉君）、漢元帝（陳堅）、王龍（楊曉偉）、烏禪幕（許国山）、盈盈（熊曉萍）、戚戚（趙琳琳）、苦伶仃（張大春）。

²⁹ 劇場版。広東漢劇伝承研究院。武漢琴台大劇院。録画：CCTV11空中劇院。人物（出演者）：王昭君（管樂瑩）、呼韓邪（万瑜）、温敦（葉林）、玉人神（黄麗華）、烏禪幕（陳文斐）、王龍（鄧振鵬）、漢元帝（魏国浩）、阿婷潔（羅瑩）、姜夫人（洪曉瑜）、孫美人（徐尚楣）、苦伶仃（魏志鵬）、盈盈（曾潔樂）、戚戚（吳靜）、休勒（王国平）等。

³⁰ 劇場版。原著：曹禺、改編：江蟄君（京劇本）。出演：江蘇省揚劇団。改編：袁振奇。監督：范繼信他。人物（出演者）：王昭君（徐秀芳）、呼韓邪（侯長榮）、温敦（繆勇）、孫美人（吳蕙明）、蕭育（楊国柱）、阿婷潔（袁曉君）、漢元帝（陳堅）、王龍（楊曉偉）、烏禪幕（許国山）、盈盈（熊曉萍）、戚戚（趙琳琳）、苦伶仃（張大春）。

³¹ 上海：新民晚報電子版、2024年5月5日。

³² 原文「王昭君們の出塞是被動的還是自願的、『漢書』与『後漢書』所説有所不同、但我還是愿意相信『漢書』「被動」説、因為一個宮女、恐怕連自願報名「出国」的資格也不会有。」

親族と永別する悲劇である。文成公主（623年頃－680年）であれ、金城公主であれ、例外はない。³³ かくて胡氏は曹禺劇が創出した悲哀を感じない王昭君を「神奇」（超人的）だと批判し、歴史上の王昭君は「英雄」ではなかったと断じる。

彼（曹禺）は命を奉じて劇本『王昭君』を書いたが、民族大団結を主旨としており、王昭君は儼然として主導的に落後した地区に行き行って献身する英雄人物となった。もし馬致遠が王昭君に最後に常軌を逸した死に方をさせたに過ぎないとすれば、曹禺先生は王昭君に全く神奇な生き方をさせたと言えよう。³⁴

ちなみに、王昭君が自ら進んで匈奴に嫁いだとする見解は、日本の吉田松陰³⁵「王昭君詞。用晋石季倫韻、井引」（「王昭君詞。晋石季倫〔崇〕の韻を用ふ、井〔なら〕びに引〔いん〕」）（1857年）³⁶にも見られ、やはり『後漢書』を根拠として、「昭君怨」を詠んだ前賢の詩文を批判し、『西京雜記』の説に毒されたものだとする。³⁷

（引）「昭君入宮不幸、請掖庭令求当匈奴請、『後漢書』所載明白、石季倫已下、唐韋端己・宋歐陽永叔・王介甫等、詠昭君者、率多哀怨之辭、殊不悉其本志。蓋『西京雜記』之説害之也。今予特掲而詠之。昭君有知、当一笑于地下耳。」

（昭君は宮に入りて幸せられず、掖庭令に請ひて匈奴の請に当らんことを求む、『後漢書』の載する所明白にして、石季倫已下、唐の韋端己〔莊〕・宋の歐陽永叔〔修〕・王介甫〔安石〕等昭君を詠ずる者、率ね哀怨の辭多く、殊に其の本志を悉さず。蓋し『西京雜記』の説之を害するなり。今予特に掲げて之を詠ず。昭君知るあらば当に地下に一笑すべけんのみ。）³⁸

政治家であり教育者であった吉田松陰も、中国の董必武と同様に、漢のために自らを犠牲にして匈奴に降嫁し辺境の戦火を防いで功名を建てた王昭君を称賛すべき人物だと考えたのである。

（詞）人生功名重、碌々死掖庭。寸心君不識、揺々如懸旌。（中略）呼韓適求婚、自請列籍名。豊容驚九重、去取閼氏崇。单于益親附、塞馬不復驚。安国兼崇己、酷勝中行生³⁹。世人寧知是、誣妄盈史冊。（以下略）

（人生は功名重し、碌々として掖庭に死せんや。寸心を君識らず、揺々として懸旌の如し。（中略）呼韓適に婚を求む、自ら請うて籍名を列ぬ。豊容九重を驚かし、去って閼氏の崇を取る。单于益に親附し、塞馬復た驚かず。国を安んじて兼ねて己を崇す、酷だ中行生に勝る。世人寧んぞ是を知らん、誣妄史冊に盈つ。（以下略））⁴⁰

日本には異民族への降嫁はなかったものの、皇女和宮（1846年－1877年）が公武合体のために徳川家茂（1846年－1866年）に降嫁したように、公家と武家の政略結婚はあった。ただ和宮自身は決して

³³ 原文「和番対一個女子來說、無論她是做了閼氏还是暮末（吐蕃王后）、都是一個離鄉背井、永別親人的悲劇。不管是文成公主、還是金城公主、概莫能外。」

³⁴ 原文「他奉命写的劇本『王昭君』、立意於民族大団結、於是王昭君儼然成了一位主動去落後地区献身的英雄人物。如果說、馬致遠只是讓王昭君最後死得離譜、那麼、曹禺先生則是讓王昭君压根兒活得神奇。」

³⁵ 吉田義卿（1830年－1859年）。長州藩士。「松下村塾」を開いて明治維新の志士を教育した。

³⁶ 『松陰詩集』二卷（山口：吉田庫三、1883年）下卷五言詩二十八句。

³⁷ 清洪亮吉（1746年－1809年）『北江詩話』第四卷に、「是れ昭君の行は、蓋し自請に由る。而して『西京雜記』は妄りに以て事は毛延寿に由ると為す、説最も鄙陋なり。而して世俗の之を信ずるは、何ぞや。余は曾て一絶有りて之を正して云ふ、『奇童は尺組を請ひ、奇女は和戎を請ふ。信ずる莫れ無稽の説、嬾妍は画工に出づ。』」（訓読は筆者）とあり、吉田松陰はあるいはこうした説によったものと思われる。

³⁸ 訓読は山口県教育会編『吉田松陰全集』第七卷（東京：岩波書店、1940年）189頁による。

³⁹ 中行説（生没年不詳）。文帝の時、漢の宦官で、閼氏として遣られる公主に同行して匈奴に行くことを強制されたことを恨んで、匈奴の老上单于に仕えて、漢を襲撃するよう唆した。漢の使者に対して、「父子兄弟死して、其の妻を取り之を妻はすは、種姓の失ふを悪むなり。」（訓読は筆者）と擁護している。

⁴⁰ 訓読は前掲『吉田松陰全集』第190頁による。

喜んで降嫁したわけではない。和宮は降嫁に際して王昭君を意識して次のような和歌を詠んでいる。

唐土（もろこし）の鑑（かがみ）の影をつらみつ、 古き都を立ち出けむ その古も今更に思ひ
こそやれ

朝廷から東夷と見なされていた將軍家に嫁ぐことでさえ苦痛とされた。王昭君の場合も、匈奴との和親を成功させたが、習俗の異なる北夷⁴¹に嫁ぐ悲哀が伴っていたとしても不思議ではなく、王昭君の犠牲があって国家の平穩が維持されたと考えれば、王昭君に同情する「昭君怨」詩が間違いであったとは断言できない。

『漢書』には王昭君の降嫁の際の感情については記されておらず、民族の団結を実現したい現代の政治と文学においては、『後漢書』を根拠に勇敢な王昭君像を創造したと言える。

⁴¹『漢書』「宣帝紀」賛に、匈奴の内乱を平定して呼韓邪単于に藩を称させた宣帝を「威を北夷に信（の）ぶ」と称賛している。原文「遭值匈奴乖乱、推亡固存、信威北夷、単于慕義、稽首称藩。」夾注に、「師古曰、信讀為申、古通用字。一説、恩信及威、並著北夷。」